

演題番号: P3-4

筆頭名: 小野昭浩

筆頭所属名: 群馬大学 呼吸器・アレルギー内科

共著者名:

○小野 昭浩1)、宇津木 光克2)、古賀 康彦1)、上出 庸介1)、西岡 正樹1)、久田 剛志1)、石塚 全1)、森 昌朋1)、土橋邦生3)

共著者所属:

1)群馬大学大学院医学系研究科2)桐生厚生総合病院3)群馬大学大学院保健学研究科

演題名: 長期に治療経過を観察し得ている鳥関連慢性過敏性肺炎の1例

患者は自宅の屋根裏・ベランダに鳥が住み着いていた形跡を持つ67歳の女性で、2007年10月より間質性肺炎として通院中に病状増悪したため2009年8月に胸腔鏡下肺生検を行った。病理組織所見の小葉中心性病変の存在から慢性過敏性肺炎を否定できず、画像的にも特発性の分類では非典型的な所見のため、東京医科歯科大学病院・呼吸器内科を紹介受診。血清中特異抗体の陽性から鳥関連過敏性肺炎と診断した。2009年12月に感染増悪症状で入院中に自宅調査を行ったところ屋根裏に鳥が生息した形跡が認められた。本人より業者に依頼し屋根裏の清掃を行った後、在宅酸素を導入して退院としたが、その後も症状不変で呼吸機能の経時的な低下を認めた。完全な抗原回避のため本人に強く勧めて2010年9月に転居して頂いたところ、自覚症状の軽快、KL-6等のバイオマーカーの低下を認め活動性の低下が示唆された。しかし転居1年後頃より徐々に呼吸困難増強しADL低下。体重減少、画像所見の悪化、拘束性障害の進行を認めたためステロイド治療導入目的に2012年1月入院となった。自覚症状の改善、一時的なA-aDO₂の改善を認めたが、画像・肺機能の改善は得られなかった。抗原回避やステロイドの奏効例が報告されているが、本症例のような重度進行例では十分な効果が得られないことが示唆された。